

2017 年度
関西福祉科学大学大学院
社会福祉学研究科
臨床福祉学専攻

修士論文題目

ひきこもりの社会復帰に関する研究
—当事者の語りから考える—

指導教員（ 畠中 宗一 ）

社会福祉学研究科臨床福祉学専攻

学生番号 11610002 氏名 上田 哲也

目次

| | |
|-----------------------|----|
| 第1章 研究の背景と目的..... | 2 |
| 第1節 研究の背景..... | 2 |
| 第2節 研究の目的..... | 5 |
| 第3節 研究方法..... | 6 |
| 第1項 用語の定義..... | 6 |
| 第2項 調査対象者..... | 6 |
| 第3項 データの収集方法..... | 7 |
| 第4項 倫理的配慮..... | 8 |
| 第2章 結果と考察..... | 8 |
| 第1節 インタビュー結果..... | 8 |
| 第1項 当事者の発言の比較と考察..... | 8 |
| 第2項 インタビュー結果の整理..... | 15 |
| 第2節 先行研究との比較..... | 17 |
| 第3節 今後の課題..... | 20 |
| おわりに..... | 21 |
| 引用文献および参考文献..... | 21 |

第 1 章 研究の背景と目的

第 1 節 研究の背景

厚生労働省は「ひきこもり」を以下のように定義している。

「様々な要因の結果として社会的参加(義務教育を含む就学, 非常勤職を含む就労, 家庭外での交遊など)を回避し, 原則的には 6 ヶ月以上にわたって概ね家庭にとどまり続けている状態(他者と交わらない形での外出をしてもよい)を指す現象概念である。なお, ひきこもりは原則として統合失調症の陽性あるいは陰性症状に基づくひきこもり状態とは一線を画した非精神病性の現象とするが, 実際には確定診断がなされる前の統合失調症が含まれている可能性は低いことに留意すべきである」

また、「若者の生活に関する調査報告書」(内閣府 2016)によると、15 歳から 39 歳までのひきこもり当事者の数は、準ひきこもり状態(ふだんは家にいるが、自分の趣味に関する用事の時だけ外出する)にある者 38.7 万人と狭義のひきこもり状態(「ふだんは家にいるが、近所のコンビニなどには出かける」「自室からは出るが、家からは出ない」「自室からほとんど出ない」)にある者 17.6 万人を合わせた広義の定義では 54.1 万人と推計されている。

なお 2010 年の同様の調査では 70 万人だったため数字上では減少しているが、2010 年版では 35 歳から 39 歳の人たちが 23.7%を占めていたため、その方々が 40 代以上になり、15 歳から 39 歳までという統計上の定義に当てはまらなくなり減少した形になったものと推測される。

これらのひきこもりに対する政府による関連施策としては主に以下のようなものがあげられる。

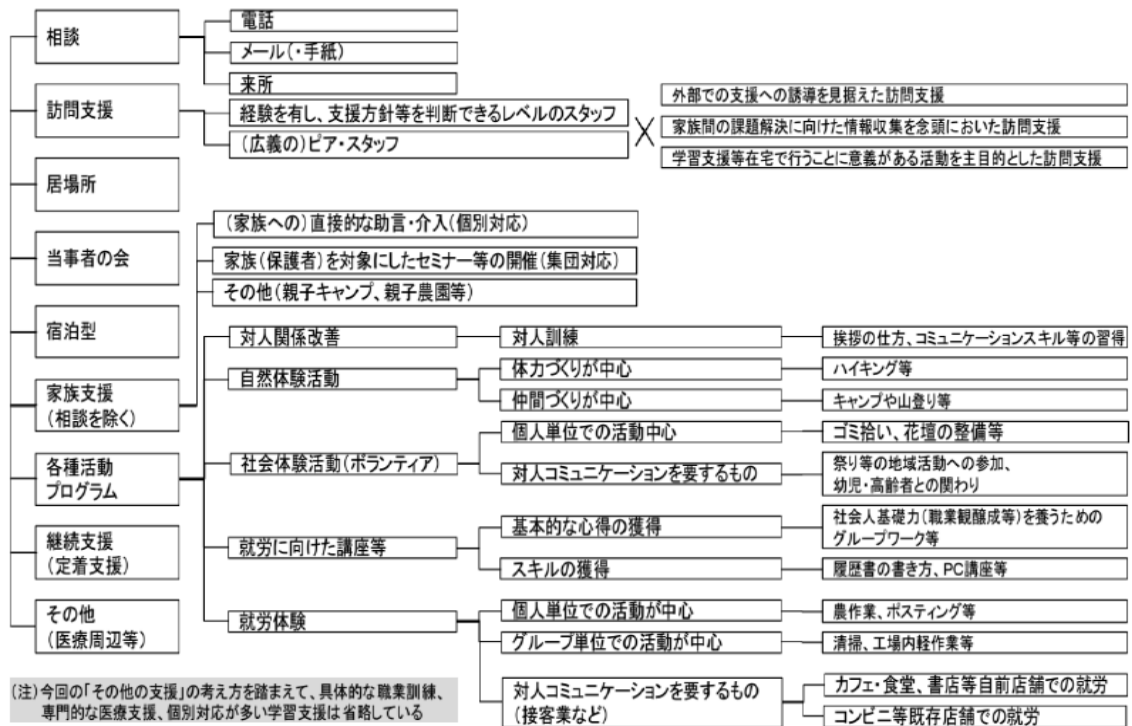
表1. 主なひきこもり関連施策

| | |
|--------|-------------------------------------|
| 2003 年 | 「若者自立・挑戦プラン」の策定 |
| 2006 年 | 「若者の自立・挑戦のためのアクションプラン」の策定 |
| 〃 | 若年無業者の職業的自立を支援する「地域若者サポートステーション」の設置 |
| 2009 年 | 「ひきこもり地域支援センター」の設置 |
| 2010 年 | 「子ども・若者育成支援推進法」の施行 |
| 2013 年 | 「ひきこもりサポーター養成研修・派遣事業」の開始 |

また、民間の団体によるひきこもり支援は、1990 年に富田富士也によって千葉県に開設されたフリースペース「フレンドスペース」に端を発する。このフレンドスペースとは、当事者が他人と交流できる居場所として活用してもらうというタイプの支援であり、現在行政・民間問わず全国のひきこもり支援の現場で行われている支援の先駆的な存在であるといえる。

そして現在では図1のように、居場所以外にも当事者が寮などでの生活を通して生活リズムから整える宿泊型支援、就労支援、学習支援、訪問支援、当事者同士による自助グループや親の会など多種多様な支援が展開されている。

図1. ひきこもり支援方法の分類



原著である内閣府（2013）「困難を有する子ども・若者及び家族への支援に関する調査研究」の該当部分が削除済みのため、福崎はる（2014）『「ひきこもり」当事者のニーズとソーシャルワーク —「ひきこもり」支援の実践からの事例研究—』より引用

これらの政府のひきこもり関連政策や民間団体による支援にも一定の効果があると思われるが、それでもなお、ひきこもり期間の長期化や、ひきこもり当事者及びその家族の高齢化が進んでいるという現状がある。

ひきこもり経験者 119 名、ひきこもりの家族 399 名を対象にした「ひきこもりに関する全国実態アンケート調査の報告」(KHJ 全国ひきこもり家族会連合会 2017)は、それらの現状を明らかにしたものであり、下記の図はそれらを示したものである。

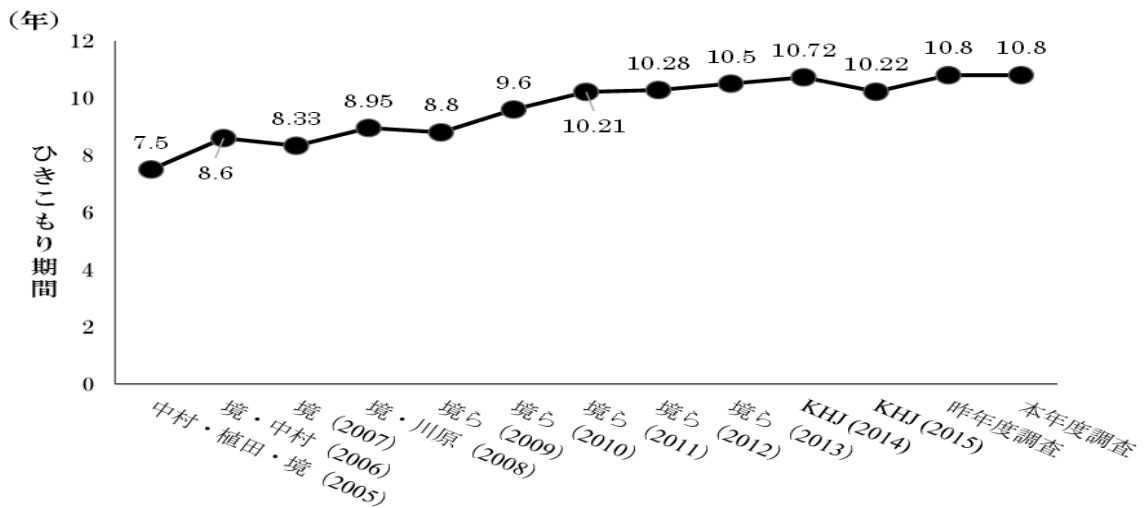
図2では、ひきこもり期間が 2005 年の 7.5 年から 2017 年の 10.8 年へと上昇している。

図3では、ひきこもり本人の平均年齢が 2002 年の 26.6 才から 2017 年の 33.5 才へと上昇している。

図4では、ひきこもりの家族の年齢が 2006 年の 60.11 才から 2017 年の 64.1 才へと上昇している。

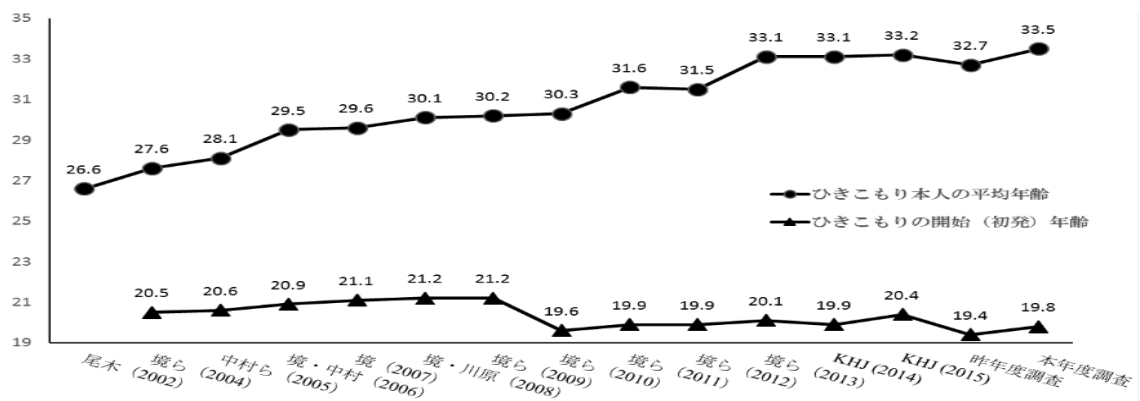
なお2017年の調査での「家族回答者の続柄」という質問項目の回答が、母親が 70.4%、父親が 25.8%であり、祖母、姉、弟などを含めたその他がわずか 1%だったことから、この図での「年齢」とは主に両親の年齢を表しているといえる。

図2. ひきこもり期間の平均の推移



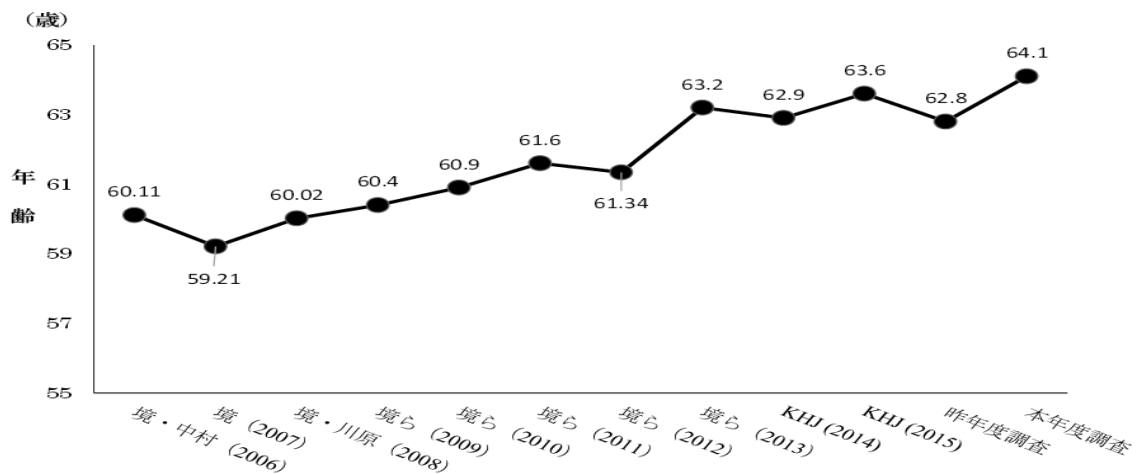
KHJ 全国ひきこもり家族会連合会 (2017) 『ひきこもりに関する全国実態アンケート調査の報告』より

図3. ひきこもり本人の平均年齢の推移



KHJ 全国ひきこもり家族会連合会 (2017) 『ひきこもりに関する全国実態アンケート調査の報告』より

図4. 家族の平均年齢の推移



KHJ 全国ひきこもり家族会連合会 (2017) 『ひきこもりに関する全国実態アンケート調査の報告』より

第2節 研究の目的

筆者にも過去にひきこもりとしての時期があり、自分の力だけで社会復帰することが考えられない状態だったが、両親や親戚の働きかけによって家から外出することに慣れていき、連れられて訪れた支援機関を利用したことがきっかけで社会復帰へと進んだという経験がある。

その経験から実際に研究を始めるまで筆者は、当事者が本人の力だけで社会復帰することは難しく、支援機関を利用することなども必要になるだろうという考え方をしていた。

しかし2017年の3月に奈良教育大学で開催された「不登校・引きこもりを経験した若者たちとガチで語り合う家庭・学校・社会」というシンポジウムに筆者が参加した際に、当事者の一人が語っていた「ひきこもり当事者の立場としては、支援を受けることは負けを意味し、支援が必要な駄目な人だと認めてしまうことになる」という趣旨の発言に衝撃を受けたことが本研究の始まりのきっかけとなった。

このシンポジウムの趣旨は、当事者やその家族、支援者や研究者などの、ひきこもり関係者に向けて、当事者4名が自らのひきこもり経験や当時の心境を語ることで当事者の生の声を世間に伝えるというものであり、このような趣旨のイベントの開催は近年増えてきている。

例を挙げると、2017年2月に大阪府豊中市で開催された「若者当事者全国集会—ひきこもってた当事者、経験者、豊中で集まろう!」、2017年6月に奈良県の吉野郡(東)人権教育推進協議会が主催した人権教育(人権のまちづくり)推進講座『「不登校、ひきこもり」を考える』などがある。

そしてこの奈良教育大学のシンポジウムに参加して自分以外の当事者たちの考え方を聞いたことによって、当事者と一口に言っても人によって考え方はそれぞれ違うことに気づいた。そしてそれと同時に上記の発言のように当事者側が支援に心理的な抵抗を示すなどの理由により当事者と支援との間にミスマッチが起こっている現状があることを知った。

この現状はひきこもりの社会復帰のためには問題があるように思われるが、上記の発言をした当事者が支援に対して心理的な抵抗があったため支援を受けずに社会復帰しているように、裏を返せばこの当事者のように支援の力を借りなくても社会復帰が可能ともいえる。

先行研究を見ると、「ひきこもり支援独自の難しさ」として、支援者の訪問サポートを受け入れないばかりか、支援者からの手紙・葉書さえ拒否したり、手紙が届いても読もうとしない事例も少なくない(竹中 2010)。とあるように、他人との関わりを閉ざしているひきこもりの支援の難しさを指摘した研究や、それを踏まえた上で支援者側から見た有効な支援方法を探るといった趣旨の研究は存在するが、当事者側の社会復帰や支援を受けることに対する心理について焦点を当て、インタビュー調査を行った研究は少ない。

そこで本研究では、上記の発言をした当事者を含めた、過去にひきこもり経験を持ち現在は社会復帰した人たちに対して、ひきこもっていた当時の状態や心境、支援や

社会復帰に対する考え方などについてのインタビュー調査を行い、ひきこもり当事者の心理や考え方を理解するひとつの手がかりとなることを目的とし、それによりひきこもり当事者の社会復帰への一助としていきたい。

そしてインタビュー調査を行うために、上記のような講演会に参加し、当事者と知り合い、研究への協力を依頼すると、自分のひきこもりとしての経験が役に立つのならば、と協力して頂けた。ひきこもり経験を持つ方にひきこもっていた当時の心理状態を想起して語ってもらうという作業は多分に侵襲的であると思われるが、それでもなお快く協力して頂いたことに深く感謝したい。

第3節 研究方法

第1項 用語の定義

前述した厚生労働省の定義のように、「ひきこもり」とは家族以外の人間との交流を絶っている、または自分の部屋や自宅から全く外に出ることができない状態が長期間続くことを指す場合が多い。

しかし本研究においては、調査対象者である当事者3名全員がひきこもっていた当時でも他人と交友関係を保っており、外出もできていたため、「学生が学校にあまり登校せず家から出る事も多くはないが、交友関係のある友人や恋人などとは連絡を取っている、またはきっかけや用事などがあれば外出はできる状態」も便宜的に含むこととする。

また、「社会復帰」とは一般的には就労や就学といった意味合いで使用されることが多いため本研究においてもそれに従っている。

第2項 調査対象者

過去にひきこもりとしての経験を持ち、現在は就労・就学している当事者を調査対象者として選定した。

ひきこもり当事者が参加する講演会やイベントに筆者が参加して発表者等に調査対象者として研究への協力を依頼した。調査対象者の簡単な属性は以下の通りである。

表2. 調査対象者の内訳

| 氏名 | A | B | C |
|-------|---------|-----|---------------|
| 年齢 | 24才 | 21才 | 21才 |
| 性別 | 男性 | 男性 | 男性 |
| 現在の状態 | 会計事務所勤務 | 大学生 | ひきこもり支援の事業所勤務 |

第3項 データの収集方法

インタビューは筆者が作成したインタビューガイドを用いて、調査対象者にはひきこもっていた当時から現在に至るまでに経験した出来事や心境、社会復帰や支援についての考え方などを中心に自由に語ってもらうため半構造化インタビューを使用した。

質問項目は下記の通りだが、話の流れや調査対象者の反応などによって順番や表現を変更して臨機応変に対応した。

インタビュー期間は2017年の7月から9月にかけてであり、インタビュー調査の場所は、調査対象者の職場の個室や筆者の所属大学の一室など静かな個室を使用した。

いずれも筆者と調査対象者の1対1の聞き取りであり、1人あたりの平均聞き取り時間は約60分だった。

なお、本研究では調査対象者の語りをそのまま引用しており、意味が通りにくい部分には筆者による注釈を入れている。

例:「学校に行けというのが、ことしかできひんのかなって」(注:「学校に行けと言う事しかできないのかなって」の意味と思われる)

表3. インタビューガイド

| |
|---------------------------------------|
| 現在の状態(年齢・職業など) |
| ひきこもっていた時期 |
| ひきこもったきっかけ |
| ひきこもり状態の程度(用事などで外出していたか、完全に閉じこもっていたか) |
| ひきこもり期間中の人間関係(家族・友達など) |
| 家族に対しての申し訳なさ、または恨む気持ちなどがあつたか |
| 当時外に連れ出してくれる人はいたか |
| 知り合いに会いたくない気持ちはあつたか |
| 社会復帰のきっかけ |
| 社会復帰段階は周りからの反応が変わつたか |
| 当時誰かに相談していたか(家族・友達・相談機関など) |
| 当時、周りの人が社会復帰に向けて働きかけてくれていたか |
| 当時、相談機関に行くように勧められたら行っていたか |
| ひきこもったことがコンプレックスになつたか |
| ひきこもりは誰でもなりえるものか |
| 今思えば、ひきこもり期間があつて良かったか |
| 現在の当事者へ伝えたいこと |
| 当時すでに社会復帰した人の体験談を聞いていたらどう感じていたか |
| 当時欲しかった支援はあるか |
| 自分から支援や助けを求める人に対する印象について |
| 強引な支援方法について |

出典:筆者作成

第4項 倫理的配慮

インタビュー実施の前に、調査対象者に研究目的・方法・倫理的配慮・個人情報とデータの取り扱いについて・インタビュー内容の録音・録音データ等消去の申し出について・調査中止の自由・調査対象者の権利について・お問い合わせ先について、についての説明を行い、研究への参加はあくまで任意であり、強制でないことを聞き取り開始前に十分に説明し、同意書にサインと捺印をしてもらい、同意後の同意撤回の自由、不参加による不利益を被らないように配慮した。

また対象者の許可を得て録音をし、個人が特定されないように人名や固有名詞はイニシャルに変えて逐語録を作成しデータとした。なお、研究を行うにあたり関西福祉科学大学研究倫理委員会の承認を得た。

第2章 結果と考察

第1節 インタビュー結果

第1項 当事者の発言の比較と考察

過去にひきこもり経験を持つ当事者3名にインタビュー調査を行った結果、3名全員に共通する事や3名それぞれ異なる事、3名のうち2名だけに共通する事や、ひきこもりに関する様々な考え方や意見が出てきたのでそれらを比較して考察していきたい。

インタビュー時点での年齢はそれぞれ A が24歳、B が21歳、C が21歳であり、3名とも20代前半で比較的年の近い男性たちだが、ひきこもっていた時期は C が小学1年生から中学校卒業まで、B が中学校3年生から高校卒業まで、A が大学2年生から1年半であり、全員学校に所属している年代ではあるが、それぞれが別々の時期にひきこもりを経験しているという違いはあった。

ひきこもりになったきっかけとして A は「そもそも何かやりたいと思って生きてきたわけじゃなかったです。」「今までひきこもるまで夢とか何も考えずに来たし」と語っているように、自分のやりたいことが見つからず大学での勉強にも興味が持てずに欠席回数が増え徐々にひきこもるようになった。

また「かかるんですね、自分のやりたいこととか夢とか、そもそも自分のいる環境とかそういうのに向き合うのに、これだけの時間」とあることや大学2年生という年代からみても、このAの事例は青年期におけるアイデンティティの確立やモラトリアムの問題として解釈することができると思われる。

一方、主に人間関係のトラブルがきっかけでひきこもりになったのが B と C である。

B「塾でまた学校休んでるやろみたいな話になった時に塾からも追い出されるっていうか」

C「プールで結構無理やり先生に、あの一入れられたりとかしたとか、結構苦痛になっていて当時、それでまあそれが決め手っていうか」

そしてひきこもり期間中の人間関係については、A は彼女に連れられて遊びに出か

けることがたびたびあった。Bは仲の良い友達とは遊びに出かけることはできていた。Cも連れ出してくれる友達は学校にはいなかったものの、フリースクールにはいたように、それぞれ親しい人との交友関係自体は残っていたが、それ以外の知り合いに会うことが気まずいので嫌だったと以下のように語っている。

A「特に大学のクラスメイトとかに顔を合わせたくないみたいなの入ってくるんで」

B「同じ高校の人とか、同じ中学やったやつとかがいると、嫌やったんで、だいぶ塾探しにも結構力入れてたんで」

C「からかわれたりとか、何で学校来ーへんねんとか言われるのがまあちょっと」

それぞれ他人と一緒に遊びにいける程度の親密さを構築できる社交性はあったにも関わらず、それ以外の人たちとの関わりに対して気まずさや後ろめたさを感じたことで学校に通うことに抵抗を持ち、それがひきこもりになるきっかけのひとつとなったようである。

出会った人たち全員と良好な人間関係を構築できる人はそう多くはないと思われるため、A「うつ病とかひきこもりって、なる人というか誰でもきっかけとか割と些細なきっかけでなるなっていうのを思って」という発言にもあるように、人間関係にさほど困難を抱えていない人であっても、きっかけさえあればひきこもり状態になる可能性はあるといえる。

そして3名とも、ひきこもったことにより自分は普通の人間たちとは違う道へと外れたという認識をしており、それがコンプレックスにも繋がっていたようである。

A「しかも1回道に外れてるわけで、でやっぱりあの一世の中大多数の人間は外れてない人がまあ多いだろうし(中略)周りの人と比べて、1歩、とか下にドーンって落ちたよねってのはずっと付き纏うんで、うんコンプレックスになると思いますし」

B「なんていうかその、おかしなヤツとか変なヤツとか、なんかサボリとか、そういう印象ですかね」

C「まあ周りの人がその、まあ学校に行っていたりとか、まあ楽しく過ごしていたりする中で自分がそうじゃないとか(中略)やっぱり自分の役割を、果たせてないんじゃないかみたいなことで、すごいなんか、うーん、ありましたねなんか辛さっていうのは」

3名とも交友関係が残っており他人と外出することも可能であるため、前述した厚生労働省による「ひきこもり」の定義には当てはまらないにも関わらず自分のことを「ひきこもり」だと認識していた。

この認識は、休まずに学校に通って問題なく卒業するといったような周りの人たちが経験している一般的な道から外れたというコンプレックスや辛さにも繋がっていた。そのコンプレックスが知り合いに会いたくないという気持ちになり、さらにひきこもりの状態が続くという悪循環にもなっていたようである。

別の質問の際だがBが「別の道があるのを知ってるのか知ってないのかって、考え方の違いの差はあるかなって」と当時と現在の考え方の違いについて語ったように、ひきこもっている時期は、一般的な道から外れたコンプレックスのせい、それ以外の別の道を選ぶといった発想は生まれにくいようである。

また、当時この3名が厚生労働省によるひきこもりの定義を知っていたかどうかは不明だが、当事者がどのようにして自分自身が「ひきこもり」だと認識していったかという

プロセスについて、今回のインタビューでは質問しなかったが今後検討する必要があると思う。

3名の親との関係については、Aは当時地元から離れた大学の近くで1人暮らしをしていたため親から直接責められることはなく、A自身も親を責める気持ちはなかったが、BとCは実家暮らしで親と一緒に生活していたこともあり、不登校を責められたりするなど親との関係で嫌な思いをすることもあったと語っている。

A「親の勧めでくれた大学に何も考えずホイホイ入ったのが、うん原因だと思ってるので親自体は責めてないですけど、親はなんか安易に大学進めたことをちょっと自分で責めてたらしいです(笑)」

B「親もみんな学校行けって言うんで、周りの大人っていうのはその、学校に行けと言うのが、ことしかできひんのかなって」(注:「学校に行け、と言う事しかできない」の意味と思われる)

C「夫婦仲が悪かったんでまあその、ねなんていうんやろ、とばっちりというか、が来てその自分がしんどくなってしまっ」

またその一方で、当時自分がひきこもっていることで親に対する申し訳ない気持ちがあったともそれぞれ語っている。

A「やっぱり家族?に合わせる顔がないやーっていうの思ってたんで」

B「ああ申し訳なさも全然ありましたね」(注:全然～肯定は近年見られる表現)

C「学校行けてない、いや行ってたらしいのに何で行かれへんのやろみたいなということで、なんか申し訳ないなどは思いましたね」

ひきこもり当事者が親に対し暴力を振るう事例もたびたび起こっているが、今回の調査対象者たちは親に対し、ある程度の葛藤はあったようだが暴力沙汰になるほど関係が悪かったわけではなかったようである。

3名の周囲の人間が本人のひきこもり状態を何とかしようと働きかけた結果、Aは彼女からの誘いに応じ病院に数回行った。そして、もし当時に親から支援機関に誘われたとしたら行っていたとも答えた。Bは親からカウンセリングに誘われたが行かなかった。Cは母からフリースクールに誘われて、当初抵抗は少しあったようだが通うようになった。

A「病院絶対連れて行くって彼女に言われたんで、まあ引っ張られて行ったんですけど」「家族?に合わせる顔がないやーっていうの思ってたんで、えっその家族から行けやって言われると、ハイ行きますってなったと思います(笑)」

B「1回カウンセリング行こうみたいに言われたんですけど結局行かなかったですね(中略)単純にめんどくさかったっていうか(笑)なんだろう、怖かったってのもありますね」

C「そうですね母親に勧められて、行きましたね(中略)そもそも不登校が、学校行けてなくていいのかって考えていたんで、そういう所でその、ありましたね抵抗っていうか」

ひきこもっている人の自宅に支援団体の人間が訪問し、ドアを破壊して部屋から当事者を連れ出して施設に入所させる、また、当事者の親から高額な費用を要求するといったような強引とも捉えられる支援方法を行う団体の存在について質問した結果、Aは「効果上がらないならやだよそういうの私、藁にもすがる思いの人に藁を渡す、高額な藁を渡すのは、私はあまり好きじゃないんですけど」「親は救われるのかなーそ

れ」と答えた。

B は「ブラック支援って別にどの支援もブラック支援になりうると思うんですよ」(注: ブラック〇〇はブラック企業などに代表される、違法行為などが常態化していることを指す概念)「例えば、支援、そんなにして欲しくないって言ってんのに、なんか思ったより過剰にしてるとか」と答えた。

C は「本人の意思じゃないですよね外に連れ出すってのは、(中略)後々トラウマになったりとか、それがもし失敗というか、んーもっと追い込んでしまったりして、しまうというリスクがかなり大きいなと思います、それで立ち直る人も中にはいるのかなみたいに思いますけど、あまり印象は良くないですね」「支援っていうのはそういう怖いイメージ、を持つとなかなかその…ね、なんか来ても会いたくないってなったりとか、そういうことに繋がるんじゃないかって思います」(注: 「(支援者が)来ても会いたくない」という意味だと思われる) と答えた。

Aはそのような支援方法について否定的な考え方を示し、Cも同じ支援者の立場として、今後の支援の際に悪影響が起こることについて触れて、同じように否定的な態度を取っている。B は、どんな支援であってもそれを受ける当事者側の印象次第では「ブラック支援」となりうる語り、当事者の気持ちに寄り添った支援の必要性が示された。

そして当時欲しかった支援については、全員直接的なものはないが C は家族の問題を改善する支援なら欲しかったと答えた。B は本研究の調査依頼を行った際にした同じ質問に対して、学習面での支援が欲しかったという趣旨の発言をしていたが、今回のインタビューではその発言はなかった。

A「自分の力だけでどうにかしたいと思って結局、支援機関とか行かずに終わらしちゃったんで、それ考えると何か欲しかったとかないですね」

C「夫婦仲っていうのを早く解決してもらえたらまあちょっと心理的な負担っていうのは少なかったかな」

そしてこの A の発言にもあるように、ひきこもっていたときに「自分の力だけで立ち直りたい」という意思があったと A と B の 2 名が答えた。C は学校への復帰を何度か考えたが不安が大きかったため難しかったと答えた。

A「自分のことなんだから自分でどうにかするしかないじゃんっていう前提を持ってたんで」

B「自分の力以外、どうしようもないやろなって思っていましたね」

C「やっぱりまた不登校になってしまいうんちゃうかって風な不安が大きかったんで」

ひきこもりは、やる気がなく怠けていて他人と上手く関われずに社会から逃げている人たち、または親を恨んで家庭内暴力や事件を起こしてしまう人たち、というようなネガティブなイメージを持たれることがある。

だが、本研究の調査対象者たちのように、ひきこもり状態から他人の力を借りずに自分の力だけで立ち直りたいという前向きな強い気持ちを持った当事者が存在するということが調査によって浮かび上がってきた。

しかし他人の力を借りずに自分の力だけで立ち直りたいという心理は裏を返せば他人の力や他人を信じていないという可能性もあるのではないだろうか。

B『学校の先生とかも親もみんな「学校行け」って言うんで、周りの大人って

いうのはその「学校に行け」というのが、ことしかできひんのかなーって思って、だからまたカウンセリング行っても同じこと言われんのかなーっていう』

B の場合は、他人、特に大人からの働きかけに対して過去に嫌な経験を持ち、それがこれからの他人との関わり、ひいては支援を受け入れることに対して拒否感を示す要因につながっていることも考えられる。

一方、社会復帰のために自分から支援や助けを求める人に対する印象について質問すると、B は現状をどうにかしようとしている意識がある強い人であり自分にその意識はなかったと答えた。C は助けてほしい所をわかっている人もいるが、ただ構って欲しいだけの人もいると答えた。A は長いことひきこもっている人が自分から助けてって言うかどうかよくわからないと答えた。

A 「5年10年本当に長いことひきこもってる人には支援は要りそうって言ったけどそういう人が自分から助けてって言うかって言われると、どうなんだろうな」

B 「現状をどうにかしようとしてる意識があるんで、僕そんな、なかったんで(中略)だからどうにかしようとしてるのはやっぱ強いなと思います」

C 「自分がね助けてほしい所をわかっている人、もいると思いますし、まあその何て言うんやろ、ただ構って欲しいだけの人もいると思うんですけど…結構分かれるかなと思います、(中略)支援者側としては、なんか困ってること言ってくれるので支援しやすいとは思いますがね」

この回答から A は他の2名に比べ、自分以外のひきこもりに対するイメージが湧かない様子が伺える。C は当事者であり現在支援者でもあることから他の2名と違った支援者目線の考え方が見られた。

B は第1章の第2節で触れたシンポジウムで「ひきこもり当事者の立場としては、支援を受けることは負けを意味する」という趣旨の発言をした当事者だが、そこから数ヶ月経過した今回のインタビューでは「自分から支援を求める人は強い」という趣旨の発言をしていることに矛盾を感じたため、それについて質問した結果、「当時は絶対強いなんて思わなかったと思う」と考え方が変化していると答えた。

その理由として不登校の親の会に参加してひきこもりに関する知識が増えたことが大きいと答えている。

それぞれの社会復帰のきっかけは、A は彼女からの働きかけで現在の仕事に興味を持った。C はフリースクールのボランティアの人から話を聞いて高等学校卒業程度認定試験を取得し大学へ進学し就職するという復帰への道を進んだ。しかし B は誰からの影響を受けたわけでもなく、大学に入学して人間関係がリセットされたことや、その後問題が起こらなかったためだと語っている。

A 「ずっと何がやりたいかなってひきこもりつつ悩んでたときに、うちの彼女がこういう仕事はどうやろと、色々資料とかを持ってきてくれた中で、うんこれはええなあと思うやつをやって、今は会計事務所に勤めております」

B 「完全にひきこもりーとオサラバした大学、からは何だろうな分かんないな、環境が変わったのがデカイのかな(中略)大学、には絶対その高校に居た友達はいないわけじゃないですか、まあこれ中3から高1の時もそうなんですけど、その一大学入って完全に人間関係がリセットされた後、なんも問題がなかったから」

C「中学校の頃からなんか、まあフリースクールにボランティアの人とか大学生のボランティアの人とか来てたんで、話を聞いたりして、思いました」

ここで一つ気になる点がある、A は「自分の力だけで立ち直りたい」という気持ちがあったと語ったが、実際には彼女からの働きかけがきっかけで立ち直っており、ひきこもっていても関係を切らずに社会復帰に向けてサポートしてくれる彼女は A にとって特別な存在だと思われるが、その彼女からの働きかけには抵抗を示さず受け入れている点である。

また、A は別の話題の際に「私が自分でどうにか(注：社会復帰の意味)できたんは、それができるだけの環境があったからやと思うし」と、ひきこもることで自身を見つめ直してその後復帰へと向かうことができたのは、親からの仕送りによって生活が成り立っていたことが大前提としてあったためとも語っている。

これらのことから、ひきこもり当事者の社会復帰において「自分の力だけで立ち直りたい」といった本人の意思と、本人が気を許せる人間のサポートなどの環境の両方が重要であり、本人の意思と周囲の人間の働きかけのタイミングが一致した場合に当事者の社会復帰がスムーズに進むと考えられる。

本人の意思がないと周囲の人間がいくら働きかけても復帰は難しいが、逆に本人の意思があっても周囲の人間からサポートなしでの復帰も同様に難しいと思われる。

また、3 名ともインタビューの時点で社会復帰してから数年が経過している。C は現在ひきこもり支援の仕事に就いており、B も同じように将来はひきこもり支援の仕事に就きたいと考えていると語った。

そして B と C は講演会で自分のひきこもり経験を公表することができており、A は現在ひきこもりとは直接的に関係のない仕事をしているが、もし役立つのなら自分のひきこもり経験を話したいと語っているように、それぞれ自分のひきこもり経験を活かしているという姿勢が見られる。

そして今から考えればひきこもっていた時期があって良かったと A と C は考えているが、B はひきこもっていた過去を今でもコンプレックスに感じている。

A「こういう経験を経たから今の自分がいるって考え方にたどりつくまでだと思うんで、たどり着いてるわけですよ、ひきこもりから抜けた時っていうのは、そしたらひきこもりっていう時期もあったけど今の自分がいるんだって思えて、こういう時期があって良かったなって思います」

B「親の会ぐらいですけど、僕が居るとこは、だからそういうとこやと、良かったな、と思うんですけど(中略)ひきこもってない人たちと一緒に居ると、なんか、そのひきこもってた時期は、アドバンテージでもなんでもないっていう、ただの損」

C「就労支援の、とかまああとひきこもりの人の、えー不登校ひきこもりの人の居場所作りっていうのをメインで働いています」「フリースクールで出来た友達とか、えーとまあスタッフの人との繋がりとかっていうのは、今ね仕事してても活かせているので、そういうところで、人との繋がりが出来たのは良かったと思いますね」

B がコンプレックスに感じていることについては、復帰した後も周囲からの反応は、B「別に僕を特別扱いする訳でもなくて、むしろなんか当たり前の状態に戻ったみたいなのぐらい」というように、復帰したことを周囲の人間が特別褒めてくれたり肯定

してくれなかったことが理由のひとつとして考えられる。

しかし B は不登校の親の会に参加して自分の経験を話せば他の参加者から肯定してくれるので、そこでは自分の経験を肯定的に思えると語っている。

B「親の会とかに出て、こもってたというのを肯定してもらえたら、ちょっとは自信付きましたかね、まあそういう、のがあっても生きていける、っていう、のを他の人から聞いて」

また別の話題の際に、A の「お外にやっとなら何かその見返りみたいなのが欲しいと思うんですよ、やっぱり」という発言があった。これらのことから当事者の社会復帰後には、ひきこもりを肯定してくれる他人と出会うことによって、自己肯定感が高まり再度ひきこもることを予防でき、社会に上手く定着できると思われる。

現在ひきこもっている当事者に向けて伝えたいことについての質問をした結果、A は最終的には本人の気持ちの問題であり悩んでいる人に対し他人がどうこう言えないが、と前置きをしながら「1回落ちたけど、そこから上に上がるってスゴイよね！って、力要るよねーって、でも上がったらやっぱスゴイことよねーうん！とだけは伝えたいです」と答えた。

B は「むしろひきこもれるんやったらひきこもってもいいんやで」「目の前に参加したくない社会があるんやったら、ゆっくりするしかないかなーって」「休むことで、まあ別の、その、社会、受け入れてくれる社会、そういうのを発見できるような、目を養うというか」と答えた。

C は「周りの人に色々言われることにあまり影響を受けすぎないことと(中略)まあ働いていて収入を得るっていうのがまあひとつ大事なかなと思うのでなんか、考えれる余裕が出てきたらなんかそういうのを目標にしてみたら、いいのかなと思います」と答えた。

3 名ともひきこもり経験者ということもあってか、無理に社会に参加するよりも一時的にひきこもって休んでもいいといったような、当事者がひきこもっているということに対して肯定的な考え方が見られる。

しかし B はこれより前の話題で「ひきこもってた時期は、アドバンテージでもなんでもないっていう、ただの損」という発言をしていたにもかかわらず、この話題ではひきこもることを肯定的に考えていることに矛盾を感じたが、これは自分自身のことについての意見と、他人のことについての意見という違いだけなのだろうか。B は支援を求める人や必要な人についての考え方も前述のように変化しており、当時欲しかった支援についての質問でも調査依頼の際と今回のインタビューでの発言内容に変化が見られた。

また、ひきこもっていた当時に既に社会復帰した人から復帰に関する体験談を聞いていたらどう感じていたかという質問をした結果、A は『何か情報出されても、「あっ自分もいける、やった！」とはそこまで急には思わないけど、きっかけにはなる、考え方の材料になる』と答えた。

B は「いやたぶん、めんどくさいなーって思って」「あの遠回しに「学校に行け」とか、だと思っんで」と答えた。

C は「その人の、ねえ例であって、なんか必ずしもなんか、同じ、同じルートというか、見方で復帰できるとかってないと思うので、まあ参考程度みたいな感じ」と答えた。

B は拒否的な態度を示しており、A と C はきっかけや参考程度にはなるとは思いますが、

あくまでその人の例であると考えているように、同じひきこもり経験者から復帰したという話を聞いたとしても、必ずしもその話に共感を示して復帰に向けて前向きに捉えるとは限らないようである。

現在の当事者に向けて伝えたいことについては、それぞれの考えを語ってくれたが、もしひきこもっていた当時にすでに社会復帰した人の話を聞いたとしても、あくまでその人の例であるというようにさほど共感を示していない様子が伺えるのが興味深い。

第2項 インタビュー結果の整理

前項ではそれぞれの質問項目ごとに当事者の発言と考察を交互に記述してきたが、ここでこれまでの内容を整理していきたい。

今回の調査対象者は3名とも年齢が近いが、それぞれ違う時期にひきこもりを経験しており、これが当事者にどんな影響があるのかについて検討する必要もありそうだ。

Aは19歳からひきこもることで自分の夢や、やりたい事を見つめ直したという点から見て、青年期のアイデンティティの確立やモラトリアムの事例として解釈することができると思われる。BとCは学校での人間関係のトラブルが主な原因となりひきこもることになる。

ひきこもっている期間中の人間関係は、それぞれ親しい他人と外出するなどの関わりは残っていたが、親しくない知り合いに会うことは気まずいため嫌だったと語っており、会ってもいい人と会いたくない人に分かれてはいるが、人間関係全てを閉ざしていたわけではない。

全員が他人と親しい関係性を構築できるほどの社交性があったにもかかわらず、親しくない知り合いとの関わりに抵抗を持ち、それが不登校やひきこもりのきっかけのひとつともなったことから考えて、人間関係にさほど困難を抱えていない人だとしてもきっかけさえあればひきこもり状態になる可能性はあるといえる。

親しくない知り合いと関わることに抵抗を持った理由は、ひきこもったことで自分は普通の道から外れたという認識を全員がしていたことが大きいと考えられる。

3名とも前述のように他人との関わりがあり外出することもできていたため、厚生労働省の「ひきこもり」の定義には当てはまらないにもかかわらず、自身のことを「ひきこもり」と認識して、休まずに学校に通って問題なく卒業するといったような、多くの人が経験する一般的な道から外れたというコンプレックスを感じている点、また、自分は外に出て他人とつながっているから「ひきこもり」ではない、という考え方が出てこなかった点が興味深かった。

親との関係については、Aは1人暮らしのためひきこもっていることを直接責められることはなく、むしろ親自身が自分のせいだと責任を感じており、A自身も親に申し訳ないという気持ちがあった。BとCは実家暮らしで親から責められるなどで嫌な思いがあった一方でAと同じく申し訳なさも感じていた。ひきこもりが親に対して暴力を振るう事件も起こっているが、今回の調査対象者は親に対してある程度の葛藤はあったようだが、暴力沙汰になるほど関係が悪かったわけではなかった。

3名の親や彼女といった周囲の人間からの働きかけの結果、Aは病院に数回だけ

通ったがすぐに辞めた。Bはカウンセリングの誘いに応じなかった。Cはフリースクールに通うようになった。一部の支援団体による強引とも捉えられる支援方法について、AとCは共に否定的な考え方を示し、Cはそれに加え、支援者の立場から今後の支援にも悪影響が起こるのではと危惧した。

当時欲しかった支援については、Cは家族の問題を改善する支援は欲しかったと答えたが、ひきこもりからの社会復帰に関しては3名とも具体的にこの支援が欲しかったという回答はなかった。Bは調査依頼の時には学習面の支援が欲しかったと答えていたが今回はその回答はなかった。この質問の回答としてAとBが自分の力だけでどうにかするしかないと当時考えていたと回答した。

ひきこもりは、無気力で社会から逃げている人たちといったイメージを持たれることがあるが、今回の調査対象者のように自力で立ち直りたいという前向きな気持ちを持ち、実際に社会復帰した当事者がいることが調査により浮かび上がってきた。

この自力で立ち直りたいという気持ちは、他人のことを信じていない事と表裏一体の可能性もある。実際Bの事例では過去の大人からの嫌な経験が原因となり、支援に対する心理的な抵抗となっていることが伺える。

自分から支援を求める人についての印象の質問からはAはひきこもりに関する知識があまりない様子が伺える。Bは現状をどうにかしようとしている強い人だと答えた。以前の発言との矛盾については、当時はそう思わなかったがひきこもりに関する知識が増えたことで考え方の変化があったようだ。Cは他の質問の時と同様に支援者目線の考え方が見られた。

社会復帰のきっかけは、Aが「自分の力だけで立ち直りたい」という気持ちがあったが実際には彼女の働きかけが大きかったという点が気になった。彼女という特に親密な人間の働きかけならば抵抗なく受け入れているという事実から、ひきこもり支援における信頼関係の構築の重要性が示唆されていると思われる。

過去にひきこもりの時期があつて良かったと今では思えるとAとCは語ったが、Bは今でもあの時期は損だと思いコンプレックスに感じている。これは、復帰した後も周りから復帰したことを特別褒めてくれたり肯定してくれていなかったことが理由のひとつとして考えられる。しかし不登校の親の会では他の参加者が肯定してくれるため自分でも肯定的に思えると語ったことから、ひきこもりを肯定してくれる他人との出会いの重要性が浮かび上がってきた。

現在の当事者への一言では、3名ともひきこもることに肯定的な考え方だった。この話題でもBは前の発言と矛盾していた。

B「主観的か客観的かっていう、その一当時視点と、当時の僕を一步後ろから見た僕の視点、とはまた別やとは思いますがね」という発言のように、状態の変化による視点の違いも当然あると思われるが、B「まだひきこもってるっていうかその、あんときの感じが抜けなくて、そのなんかこうつまずいた時にひきこもりそうになっちゃうんですね」この発言にもあるように、ひきこもり当事者は社会復帰後も一定の期間は、社会に移行しながら他者との関わりや状態の変化など様々な要因により考え方は揺れ動いていくものだと思われる。そしてBは今まさにその段階にいることが伺える。

一方Aは「抜け出すと、一気に前見ちゃうから(笑)結構過去のものになると思う、う

人によるけど、なる、私はなる」と語っており、前述の通り「ひきこもりの時期があつて良かった」と思えるほどひきこもり経験を自分の中で消化した様子が伺える。

当時、社会復帰した人の話を聞いていたら、全員があくまで参考程度にしか受け止めないだろうと答えた。同じ経験をした人からの話を聞いても社会復帰に対して強い影響があるとは限らないということが示された。

今回のインタビュー調査で3名の当事者にひきこもっていた当時から現在までの気持ちや考え方などについて自由に語ってもらった結果、ひきこもっていた当時から「自分の力だけで立ち直りたい」という強く前向きな考え方を持ち実際に社会復帰した当事者や、今ではひきこもりの時期があつて良かったという考え方ができるほど、ひきこもり経験を自分の中で消化している当事者の存在が明らかになった。

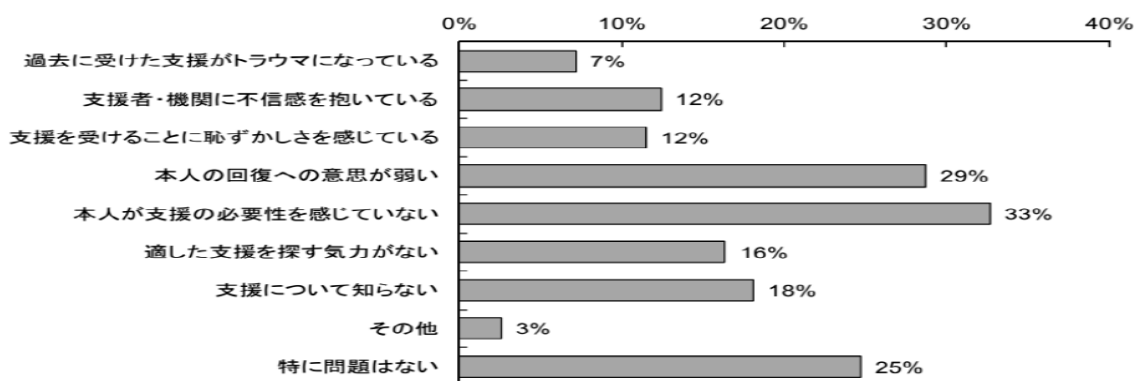
これらの当事者の考え方は、ひきこもり当事者の心理や考え方を理解するひとつのヒントとなるのではないだろうか。

第2節 先行研究との比較

今回のインタビュー調査の結果はサンプル数が少ないことに加え、前述のように講演会で自分の経験を語る事ができる人たちという偏りがあるため、いくつかの先行研究と今回の調査対象者たちを比較して、平均的なひきこもり像と共通する点や異なる点について考察していきたい。

まずは共通する点を見ていきたい。15歳以上40歳未満の兄弟姉妹、子ども、孫のうち、現在ひきこもり、ニートなど、社会生活を円滑に営む上での困難を抱えている方1,546人に対して行った「困難を有する子ども・若者及び家族への支援に関する調査研究」(内閣府 2013)というインターネット調査の、当事者の家族への「適切な支援を受ける上での、本人に関する障壁」という質問の結果が図5である。

図5. 適切な支援を受ける上での、本人に関する障壁



原著である内閣府(2013)「困難を有する子ども・若者及び家族への支援に関する調査研究」の該当部分が削除済みのため、福崎はる(2014)『「ひきこもり」当事者のニーズとソーシャルワーク — 「ひきこもり」支援の実践からの事例研究—』より引用

「本人が支援の必要性を感じていない」が33%と最も多く、「本人の回復への意志が弱い」が29%でそれに続いた。

それ以外の具体的な回答は、「支援について知らない」が18%、「適した支援を探

す気力がない」が 16%、「支援者・機関に不信感を抱いている」と「支援を受けることに恥ずかしさを感じている」がともに 12%、「過去に受けた支援がトラウマになっている」7%、「特に問題はない」が 25%、「その他」は3%となっている。

この結果はあくまで家族が感じていることであるため、当事者自身が同じように感じているかどうかは不明であるが、これらの回答と今回の調査対象者の発言を比較してみると、本研究のきっかけとなった「ひきこもり当事者の立場としては、支援を受けることは負けを意味し、支援が必要な駄目な人だと認めてしまうことになる」という趣旨の当事者の考え方に当てはまる「支援を受けることに恥ずかしさを感じている」という回答が出てきた。この考え方はこのアンケートでも上位の回答ではないが、このような考え方を持つ当事者も一定数いると思われることが分かった。

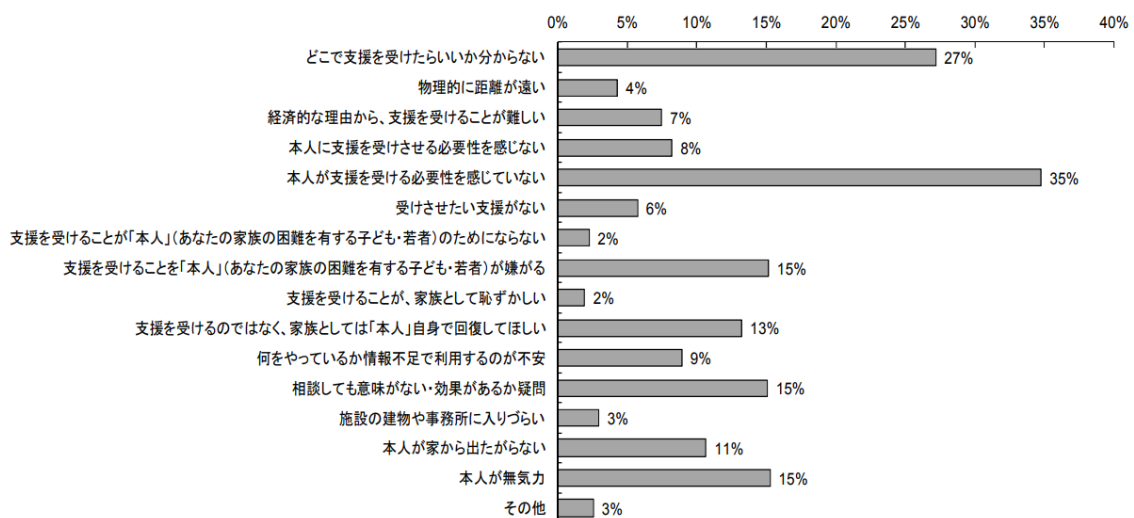
また、「自分の力だけで立ち直りたい」という趣旨の直接的な回答はなかったが、「本人が支援の必要性を感じていない」「過去に受けた支援がトラウマになっている」「支援者・機関に不信感を抱いている」「支援を受けることに恥ずかしさを感じている」の4つの回答は、もし「自分の力だけで立ち直りたい」という意思を心の中に秘めていたとするならば、「自力で立ち直りたいから支援の必要性を感じない」「支援にトラウマがあるから自力で立ち直りたい」「支援に不信感があるから自力で立ち直りたい」「支援を受けることは恥ずかしいから自力で立ち直りたい」となるように矛盾しない回答であると捉えることもできるだろう。

しかし「自分の力だけで立ち直りたい」という気持ちを家族が感じ取れるほど当事者が強く意思表示していることはこの結果からは読み取れないだろう。

そして29%あり2番目に多かった「本人の回復への意志が弱い」を見ると、今回の調査対象者は比較的回復への意思が強かったこともわかる。

また、上記の内閣府による調査の2012年版でも、家族に対しての「本人が支援を受けていない理由」という質問項目の結果でも「本人が支援を受ける必要性を感じていない」との回答が35%で最も多かったが、少し趣旨の違う質問項目のため様々な回答が見られた。この質問の結果が図6である。

図6. 「本人が支援を受けていない理由」



内閣府 (2012) 「困難を有する子ども・若者及び家族への支援に関する調査研究」より引用

「支援を受けるのではなく、家族としては「本人」自身で回復してほしい」という回答は13%で6番目に多かったが、今回の調査対象者の家族が、本人をカウンセリングに誘ったり、フリースクールに通わせたりするなど何らかの動きを見せていたことは対照的だった。そして「支援を受けることが、家族として恥ずかしい」という回答も2%ながら存在し、少数ではあるが支援を受けることへの心理的抵抗が家族にも存在することが先行研究から明らかになり、家族のそういった考え方が本人の考え方にも影響を与えている可能性も考えられる。

また、『ひきこもり者の心理状態に関する一研究 ―文献における「当事者の語り」の分析より―』（板東充彦 2007）を見ると、当事者55名の心理状態をKJ法で分類した結果のひとつとして「社会から外れてしまったような感覚」という中グループがある。今回の調査対象者3名も同じく、ひきこもったことによって自分は普通の人間ではなくなってしまったというような認識をしていた。さらに、「知り合いに会うのが嫌」という小グループの「自分のしていることは恥ずかしいことだ」という劣等感がありましたので、家の外で昔の同級生や親戚とかに会うのがイヤだったんです」という当事者の語りの例も、親密ではない知り合いに会うことが気まずいので嫌だったという今回の調査対象者と共通しているように、これらの心理は多くのひきこもり当事者に共通する事ともいえるだろう。

一方、平均的なひきこもり像と異なる点を見てみたい。第1章の第1節でも取り上げたKHJ全国ひきこもり家族会連合会の「ひきこもりに関する全国実態アンケート調査の報告」によると、ひきこもりが始まった時期の平均年齢は19.5歳、ひきこもりの平均年齢は34.0±7.8歳である。

そして当事者が回答した支援・医療機関を利用することに対する抵抗感については「10段階で3以下と回答した人は46.2%となり、支援・医療機関を利用することに対して抵抗を感じていない人が多いことが分かります。その一方で、19.5%の人が8以上と回答しており、これらの方は支援・医療機関を利用することにとっても抵抗を感じていると考えられます。」(KHJ全国ひきこもり家族会連合会 2017)となっている。

この調査自体も、KHJ全国ひきこもり家族会連合会の月例会参加者のうち、調査協力の得られた人のみを対象としている。そのため、自宅や自室から出て来られない状態の当事者と比べた場合差がある可能性はあるが、その状態の当事者本人への調査は非常に困難であるため、当事者を対象にした調査の中ではサンプル数も多く信頼性が高いものであるといえるだろう。

しかし本研究の調査対象者のひきこもり始めた時期は、それぞれAが大学2年生、Bが中学校3年生、Cが小学校1年生。ひきこもりから復帰した時期はそれぞれAが21歳(もし通っていれば大学4年生の時期)、Bが大学入学時、Cが中学校卒業時であるため、一般的なひきこもりと比較すると年齢的にも若く、支援・医療機関を利用することに対する抵抗感も強いという特徴を持っている。

そして、「ひきこもる若者たちと家族の悩み」(東京都青少年・治安対策本部 2008)によると、ひきこもりには「人間関係などに困難を感じている者が多く、孤立しがちであるため、孤独感を感じ、ストレスに弱い者が多いと推測される」という傾向があるとされ

ているが、今回の調査対象者たちは皆、他人と一定の親密さを構築できていた人たちだったが様々なことがきっかけになり結果的にひきこもり状態になった。

この2つの先行研究の結果と比較すると、本研究の調査対象者たちは平均的なひきこもり像と比べ、それほど深刻な状態ではなかったともいえるが、この理由としては「ひきこもり」という概念が拡大を続けていることも関係していると考えられる。

「青少年白書—青少年問題の現状と対策—」(総務庁青少年対策本部 1990)によると、「ひきこもり」とは「一日中自室にこもったり、食事も自室に持ち込んで一人で摂ったりするなど、家族外の人間のみならず家族との接触までも最小限にしようとするもの」と定義されていた。これは現在の「ひきこもり」の定義と比べると範囲が限定的だと感じる。

一方、現在では前述した厚生労働省の定義に加え、「ひきこもり親和群」と呼ばれる「実際にはひきこもっていないにもかかわらず、ひきこもる人の気持ちがわかるとか、自分でもひきこもりたいと思う人々」(内閣府 2010) という概念まで用いられるようになった。

「ひきこもり」とは一部の若者を指す言葉ではなく、もはや対人関係や就労についてなんらかの困難を持つ若者全般を指す概念となっているといってもよいであろう(村澤 2017) ともあるように「ひきこもり」の概念が拡大した結果、今回の当事者たちが「ひきこもり」に含まれることになったと表現することもできる。

かつては一部の人たちを指していた「ひきこもり」という概念の拡大、ひきこもり期間の長期化や当事者の高齢化、ひきこもり親和群の存在などは、ひきこもり当事者の社会復帰のためには本人たちの努力だけに任せるのではなく、これからの社会がそのような人たちを受け入れやすくなるように変化する必要性があることを示唆しているとも考えられる。

第3節 今後の課題

本研究における課題として、まずは対象者の範囲の狭さが挙げられる。今回調査対象者として選定したのは、講演会などで自身のひきこもり経験を語る事ができる方々ということもあり、現在ひきこもっている方や、社会復帰しても自身のひきこもり経験を他人に打ち明ける事に抵抗のある方たちと比べると、考え方などに違いが出る可能性があるため、今後は対象者の範囲を広げて一般化につなげていきたい。

また本研究では「社会復帰」という概念が無条件で正しいものという前提で進めた形になってしまったが、ひきこもりつつ生きるという考え方やひきこもり状態を肯定的に捉える考え方、また、ひきこもり当事者を受け入れられるように社会のあり方を問い返すという議論は先行研究には存在する。(伊藤 2015) 今回はそれらについてあまり触れることはできなかったが、今後はそれらの考え方を踏まえ様々な視点から研究していきたい。

また、先行研究の中に「ひきこもる本人から親への思いや感情に注目する研究は少なく、萌芽的な研究領域であると言える。」(岡部・青木・深谷・ほか 2012)とあったが、今回の調査対象者は親への思いを抵抗なく語ってくれたため、そこにもう少し重点を置いて質問していれば、研究の独自性が高められた可能性もあった。

ここからは調査の結果から浮かびあがった、検討する意義があると思われることについて挙げていきたい。インタビューの結果の中でも特に B の発言や考え方の変化から察するに、ひきこもり当事者の考え方は、ひきこもっていた当時、社会復帰した直後、社会復帰して数年が経過した時点など、その時期や状態、人との関わりなど様々な要因によって変化するものと思われる。

そこから考えて、1 人の当事者に対して数年に渡って縦断的調査を行い、時期ごとの状態や考え方の変化を調べることによって、何が要因となって当事者に影響を与えているのか、またどんな影響なのかということも明らかになると思われる。

具体的な要因は、自分以外の当事者との出会い、自身のひきこもり経験を肯定してくれる他人との出会い、ひきこもりに関連する情報を得ること、また、他人にひきこもり経験を否定されるなどが考えられる。

具体的な影響は、自身のひきこもり経験の肯定が可能になる、同様の経験をしている人との関わりの中に安心感が生まれる、また、他人との関わりの中でひきこもり経験があることにコンプレックスを感じるなどが考えられる。

このような研究は質問紙によるものは既に存在するが、(吉田光爾・小林清香・伊藤順一郎・ほか 2005) インタビューによる調査は少ないため、新たな知見が得られる可能性がある。

他には、ひきこもり始める時期の違いが当事者にどのような影響を与えるか、当事者がどのようにして自分自身を「ひきこもり」と認識するかというプロセスについても今後検討する意義もあるのではないだろうか。

おわりに

最後に、本論文の執筆において、ご指導いただきました指導教官である関西福祉科学大学の畠中宗一先生に心より感謝いたします。

また、インタビュー調査に快く協力し本音で語っていただきました当事者の 3 名の方々に厚く御礼申し上げます。そしてひきこもりに関する様々な知識や情報を教えていただきました『「若者支援」のこれまでとこれから』勉強会の参加者の皆様、日々切磋琢磨した関西福祉科学大学大学院生の皆様にも御礼申し上げます。

引用文献および参考文献

- 石川良子 (2007) 『ひきこもりの〈ゴール〉—「就労」でもなく「対人関係」でもなく』 青弓社.
- 荻野達史・川北稔・工藤宏司・ほか (2008) 『ひきこもりへの社会学的アプローチ—メディア・当事者・支援活動』 ミネルヴァ書房.
- 近藤 直司 (2001) 「ひきこもりケースの家族援助—相談・治療・予防」 金剛出版.
- 斎藤環 (2002) 「ひきこもり救出マニュアル」 PHP 研究所.
- 竹中哲夫 (2010) 「ひきこもり支援論」 明石書店.

- 丸山康彦 (2014) 「不登校・ひきこもりが終わるとき」 ライフサポート社.
- 森口秀志・川口和正・奈浦なほ (2002) 「ひきこもり支援ガイド」 晶文社.
- KHJ 全国ひきこもり家族会連合会 (2017) 「ひきこもりに関する全国実態アンケート調査の報告」 (<http://www.khj-h.com/pdf/20170413sakai.pdf>, 2017.11.12).
- 伊藤康貴 (2015) 『「ひきこもり支援」における当事者活動の位相 : 社会運動と当事者研究という視角から』 「日本教育社会学会大会発表要旨集録」 (67), 266-267.
- 岡部茜・青木秀光・深谷弘和・ほか (2012) 「ひきこもる若者の語りに見る" 普通" への囚われと葛藤 : ひきこもる若者へのインタビュー調査から」 『立命館人間科学研究』 (25), 67-80.
- 荻野達史 (2007) 『相互行為儀礼と自己アイデンティティ:「ひきこもり」経験者支援施設でのフィールドワークから』 「社会学評論」 58(1), 2-20.
- 川北稔 (2014) 「ひきこもり経験者による空間の獲得」 『社会学評論』 65(3), 426-442.
- 草野智洋 (2012) 「大学生におけるひきこもり傾向と人生の意味・目的意識との関連」 『カウンセリング研究』 45(1), 11-19.
- 竹中哲夫 (2009) 『ライフステージに対応したひきこもり支援 : 「ひきこもり状況」と支援課題』 「日本福祉大学社会福祉論集」 (120), 1-30.
- 中村好孝 (2005) 「支援活動からみたひきこもり—ある民間支援団体の事例を手がかりにして」 『年報社会学論集』 (18), 136-146.
- 畑哲信・前田香・阿蘇ゆう・ほか (2004) 「社会的ひきこもりの家族支援—家族教室の結果から」 『精神医学』 46(7), 691-699.
- 原未来 (2012) 「対象関係組み替え過程としての「ひきこもり」と〈回復〉 : 当事者の語りと支援実践から」 『生活指導研究』 (29), 175-193.
- 板東充彦 (2005) 「非精神病性ひきこもり者に対するグループ・アプローチの展望 : 整理と位置づけの試み」 『九州大学心理学研究』 6, 107-118.
- 板東充彦 (2007) 『ひきこもり者の心理状態に関する一研究 —文献における「当事者の語り」の分析より—』 「九州大学心理学研究」 8, 185-193.
- 福崎はる (2014) 『「ひきこもり」当事者のニーズとソーシャルワーク —「ひきこもり」支援の実践からの事例研究—』 熊本学園大学大学院社会福祉学研究科 2014 年度博士論文
- 村澤和多里 (2017) 『「ひきこもり」概念の成立過程について—不登校との関係を中心に—』 『札幌学院大学人文学会紀要』 (102), 122.
- 吉田光爾・小林清香・伊藤順一郎・ほか (2005) 「公的機関における支援を受けた社会的ひきこもり事例に関する 1 年間の追跡研究から」 『精神医学』 47(6), 655-662.
- 和辻健太・三浦恭子・青木省三 (2011) 「ひきこもり—一歩足を踏み出すのを援助する」 『臨床心理学』 11(3), 341-346.

- 池上正樹（2016）「引きこもり当事者が明かす“ブラック支援”の実態」
（<http://diamond.jp/articles/-/91465>, 2018.1.7）.
- 厚生労働省（2010）「引きこもりの評価・支援に関するガイドライン（本文）」
（<http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-12000000-Shakaiengokyoku-Shakai/0000147789.pdf>, 2017.7.20）.
- 東京都青少年・治安対策本部（2008）「ひきこもる若者たちと家族の悩み」
（http://www.seisyounen-chian.metro.tokyo.jp/seisyounen/pdf/seisyounen/pdf/14_jyakunen/20_gaiyou.pdf, 2017.12.2）.
- 内閣府（2012）「困難を有する子ども・若者及び家族への支援に関する調査研究」
（http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/shiensya/h24/pdf_index.html, 2017.11.24）.
- 内閣府（2013）「困難を有する子ども・若者及び家族への支援に関する調査研究」
（http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/shiensya/h25/pdf_index.html, 2017.11.24）.